

神奈川県考古学会

考古かながわ 第55号

文化遺産の記録をすべての人々へ！

村澤 正弘

「文化遺産の記録をすべての人々へ！」という表題は、全国遺跡報告総覧プロジェクト（旧：全国遺跡資料リポジトリ・プロジェクト）が主催する全国遺跡報告総覧シンポジウムのテーマであり、そしてチームが目指しているものです。

「リポジトリ (repository)」とは、データの一元的な貯蔵を意味しています。このチームが進めているプロジェクトは、発行部数が少なく入手が難しい学術資料（＝灰色文献）である遺跡の発掘調査報告書をデジタル化し、全国遺跡報告総覧システムを通して公開され、必要とする人がいつでも誰もが利用できるシステムの研究・開発と構築です。

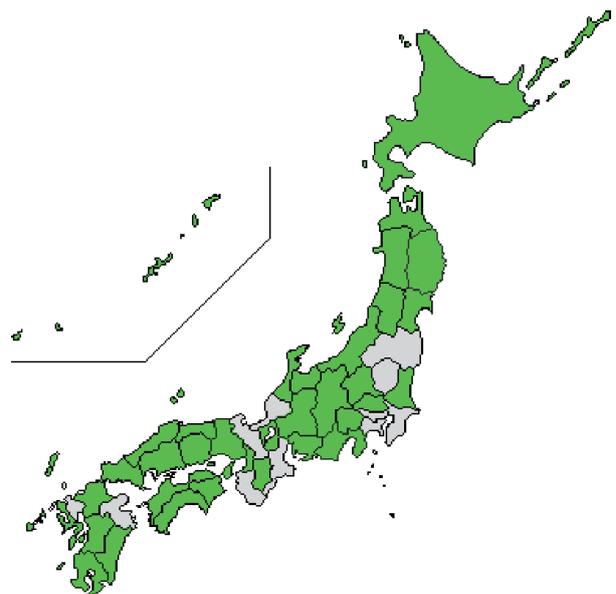
このプロジェクトは、2008年に中国地方の5つの国立大学図書館が提案した「遺跡資料リポジトリの構築：中国5領域から広域連携へ」と題した企画に対して、国立情報学研究所の最先端学術情報基盤整備事業委託事業や日本学術振興会科学研究費補助金などの経費的支援を受け、研究が始められました。2012年には22府県に拡大し広域化が図られています。この企画は、大学図書館が各領域の自治体担当部局と連携・協力を得て進めているものですが、2013年からは国立文化財機構奈良文化財研究所と共同して事業を進め、大学図書館を介せずして、遺跡調査報告書の発行主体である各自治体等の判断でプロジェクトに参加し、報告書の登録・公開ができるようになりました。

この「全国遺跡調査報告総覧」は、2015年6月25日から一般公開されています（「全国遺跡調査報告総覧」と検索すれば、最初に表示されます。）。遺跡調査報告書は、今まで約20万冊刊行

されていますが、このうちの約1万6千冊がこのシステムを介してインターネット上から閲覧、そしてダウンロードすることができ、印刷することもできます。この中には約100年前の1917年に刊行された「宮崎県西都原古墳調査報告書」も含まれています。

このプロジェクトに参加している発行機関は326機関（2015.12.27現在）を数えますが、神奈川県内の機関は一つも参加していません。この実態に対して学会員の皆さんはどのように思われますか。ちなみに長野県では、2010年からプロジェクトに参加していますが、当初から「全国一の収録数」を目指し、早くから県教育委員会が関わって行われています（2015.12.27時点で63機関2,523冊）。

「全国遺跡調査報告総覧」は、遺跡調査報告書



色の濃い部分はプロジェクト参加機関がある都道府県
「全国遺跡調査報告総覧」ホームページより (2015.12.27)

のみならず、研究論集・遺跡地図・見学会資料・講演会資料・展示図録なども登録可能となっています。登録データはPDFデータですが、OCR処理加工が基本であることや、1994年から始められた「報告書抄録」（遺跡調査報告書の巻末に掲載している遺跡の概要を記した表）のデータも登録されていることから、膨大な収録資料の中から特定事項を検索して利用できる優れたものです。ちなみに「土偶」というキーワードで検索したところ、1824件の文献がヒットしました。

遺跡調査報告書のデジタル化ということで誤解されていることは、「紙媒体の印刷物は止めてCD-ROM媒体のデジタルデータにする。」という解釈です。これは大きな間違いです。プロジェクトにおいても、保存媒体としての印刷版報告書の必要性、報告書の利用促進を図る上での電子版報告書の有効性と、分けて考えています。さらに電子版報告書については、保存用の高精細印刷用データと公開用データの2種類の作成を勧めています。つまり、主たる保存対象は紙で作成された印刷物であり、副としてデジタル加工を収めたCD-ROM等ということで、この位置関係は揺らぐことはないでしょう。

可視化という視点からみると、印刷物は冊子として形となって私たちが触れ見ることができる物体です。電子化はその保管媒体であるCD-ROM

等から離れ、そのデータを保管するサーバーに収められ、物体として目に見えませんが、インターネットを介して、いつでも誰でもが、そして今ではスマートフォンなどを利用してどこでも見ることができます。

さらに、インターネットによる可視化による大きな利点があります。それは、多くの人たちが、インターネット上でデータが保管されているサーバーが正常に機能しているかを点検してくれているということです。インターネットで見ることができなくなったら、迅速に修復作業に移れるということです。この電子化の公開用PDFデータは、図書館では閲覧用図書ということになります。閲覧用図書自体の状態の把握は借出者か、職員が行う点検時しかありません。

また、電子化の公開用のデータ蓄積は、サーバーに収められていますが、バックアップ用として海外のサーバーに収めることも容易です。したがって、災害等によって印刷物が失われた場合において、応急的に対応できることも大きなメリットです。

ちなみに、印刷物をPDF版に加工するには、印刷物を作成する過程の中で発生するデジタル加工時にPDF版を作成すれば済みます。既存の印刷物についても今では冊子物のまま（非破壊）で、かつOCR処理しても1冊数千円という価格帯で行ってもらえます。

茅ヶ崎市下寺尾官衙遺跡群を訪ねて 押木 弘己

平成27年3月21日の土曜日、春分とはいっても冷たい風が吹く中、茅ヶ崎市に所在する下寺尾官衙遺跡群と、その関連施設をめぐる見学会に参加しました。3月10日付けで国史跡になったばかりの同遺跡群について、岡本孝之会長と茅ヶ崎市教育委員会の大村浩司さんから熱のこもった、そして時に軽妙な掛け合いをまじえながらのご説明をいただき、しばし寒さも忘れて楽しいひと時を過ごすことができました。

午前中は市の文化資料館にて、史跡指定までの道の

りを中心に、遺跡群を構成する七堂伽藍跡や高座（たかくら）郡衙（ぐんが）跡の内容について出土品や写真パネルを見ながらレクチャーを受け、70年以上も前から地域の大切な財産として後世に伝える努力が続けられてきた事実を改めて重く受け止めました。

午後はJR香川駅に再び集合した後、時折小雨が落ちてくる中を現地まで歩いて向かいました。まずは小高い台地の上って、2002年に高座郡衙が発見された県立茅ヶ崎北陵高校のグラウンドへ。球児たちの練習試合を尻目に、調査当時の様子を思い出しながら説明を伺いました。旧校舎が解体されていたこともあって、改めて政庁をはじめとする郡衙域の広大さを実感することができました。

郡衙の区画溝や弥生中期の環壕集落、縄文前期の西方貝塚など盛りだくさんなお話を聞きながら台地を下

り、小出川の橋の上で立ち止まります。ここでは河川の付け替えに伴う発掘調査で古代の川港（津）が発見されていて、当時の役所や寺院が水陸交通の要路に置かれたことを実証する貴重な成果が挙がっています。

最後に「七堂伽藍跡」の記念碑を拝し、58年前の建碑発起人に敬意を抱きながら伽藍の中心域を望める場所へ。今は畑に戻っていますが、2010年までは毎年のように大村さん主導のもと確認調査が実施され、幾度となく現地説明会にも足を運ばせていただきました。区画施設の検出に始まって版築造成された基壇、廂付きの大型建物…どれも重要な発見でしたが、これらの一つ一つが丁寧に調査されてきたことで、今回の史跡指定に至ったことは言うまでもありません。大村さんは頻りに「これからは若い世代に…」と仰っていましたが、これまで培ってこられた経験を次の世代に伝えるのと同時に、まだまだ第一線で現場に立って遺跡のもっている魅力を発信し続けてくださることを期待し、そして応援しています。

見学会の締めくくりにあたり、岡本会長からは史跡

の整備・活用する方法について、どのような形で進めていくのが良いか、という問い掛けがありました。「一人一答」と言われながら即座に応じることができず、今もまだ具体的なイメージを思い描けていません。もちろん、行政機関や地域住民の皆さんが中心となって進めていく事柄ですが、私自身も皆さんと一緒に勉強を続けながら、自分なりの考えを導き出していきたいと思っています。



寒さも吹き飛ばす大村さんからの熱の籠った説明

第 39 回

神奈川県遺跡調査・研究発表会 参加記

小林 康幸

平成 27 年 11 月 15 日に横浜市歴史博物館で開催された第 39 回の遺跡調査・研究発表会に参加しました。顔見知りの役員の方に求められるまま、参加記を書かせていただくことになりました。

私がこの発表会に初めて参加したのは昭和 58 年（1983）の第 7 回ですから、かれこれ 30 年以上、参加していることになりました。発表会が神奈川県考古学会の主催になって久しいが、最近パソコン機器の飛躍的な普及により、ほとんどの発表がパワーポイントを使用した視覚的に非常に解りやすい説明になっています。また発表要旨も事前に手際よく鮮明な印刷物にまとめられ、発表内容の理解に大きな助けとなっています。開港記念会館の薄暗いホールでスライドに不具合が生じて時々発表が中断し、発表者・映写担当者がともに冷や汗をかき、当日、追加資料がコピーで配布されていた昔が懐かしくさえ感じられます。

さて今回の発表会は、中世の鎌倉と伊勢原を特集テーマに開催されるとの案内があり、以前から伊勢原

市域の中世遺跡に興味があった私は、非常に楽しみに参加させていただきました。当日は、鎌倉市関係の発表 1 本（中世、発表者：宮田眞氏）と玉林美男氏による特別講演「鎌倉市の寺院遺跡について」、伊勢原市関係の発表 4 本のほか、川崎市（古墳時代、発表者：栗田一生氏）、横浜市（近代、発表者：太田雅晃氏）の発表が各 1 本ありました。ここでは伊勢原市域の発表を中心に感想を述べさせていただきます。

上粕屋・和田内遺跡（発表者：土任隆氏）は、中世の熊野神社・極楽寺に関連する遺構の発見で注目された遺跡です。当日も会場で質問をさせていただきましたが、SX203 として報告された石組遺構は、茶毘跡ではないかと考えられます。

子易・中川原遺跡、子易・大坪遺跡（発表者：井辺一徳氏）は、大山山麓に展開した遺跡群で中世だけでなく古墳時代後期の横穴墓や縄文時代中期の遺構なども発見されています。中世の呪符木簡が出土したことは、遺跡の性格を明らかにするうえで重要な発見であると思います。

浄業寺（第 2 次）、三ノ宮・上竹ノ内遺跡（発表者：早田利宏氏）は、土地造成の様子が明らかになり、中世瓦の出土で注目された遺跡です。遺物としての瓦は 13 世紀前半のものですが、瓦の年代に合致する具体的な寺院跡（浄業寺跡）の遺構は発見されていません。13 世紀代の瓦葺建物は調査区西側の丘陵上に存在するのではない

かという感想を持ちました。

神成松遺跡第6地点（発表者：土本医氏）は、谷底の土地開発により中世から近世にかけて連綿と続く畠地の変遷が明らかになった遺跡です。

私はいつも発表を聞きながら、発掘調査の成果から何が

わかったのか、時代を問わず、当時の人々がどんな暮らしをしていたのかということに関心を寄せています。例えば、畠地の畝状遺構が発見された報告（神成松遺跡）を聞きながら、「畠では何が作られていたの？」、「耕作者はどこに集落を営み暮らしながらここで耕作を行っていたの？」といったことを素朴に考えました。考古学が遺構や遺物から人類の過去の歴史を明らかにする学問である以上、人間の存在を無視して、いかに遺構や遺物の状態について詳しく説明をしようとも、何も伝わってこない気がします。遺跡の調査範囲にとどま



当日は大勢の来場者が発表に聞き入りました。

らず、遺跡の周辺地域にまで視野を拡げた発表をしていただきかったと思います。このことは特定の発表に限らず、すべての発表に共通して感じられたことでした。資料整理が途中で報告書刊行前の段階においては非常に慎重になることも理解できますが、もう一歩踏み込んで地域の歴史像を描いていただけたら、もっと遺跡への夢がひろがったのではないかと思います。

色々と率直な意見を述べさせていただきましたが、多忙な時間を割いて発表要旨を作成され、発表をお引き受けくださった発表者の皆様に感謝したいと思います。

平成 27 年度第 2 回見学会参加記
川崎市民ミュージアム
企画展『古鏡—その神秘の力—』展
見学記
土屋 稔里

2015 年 10 月 11 日（日）に川崎市市民ミュージアムで開催された、2015 年度第 2 回見学会「企画展 古鏡—その神秘の力」に参加をさせていただきました。展示項目 I 章から VI 章までのテーマにそって多数の鏡が展示されていて、迫力のある内容でした。展示の解説は川崎市市民ミュージアムの学芸員、新井悟さんです。

第 II 章では漢の鏡が展示され、その中で前漢鏡様式に含まれる銘帯鏡から、後漢鏡様式に含まれる連弧紋鏡が誕生したという流れが示されていました。銘帯を 1、2 圏めぐらすものに連弧紋が加わり、後に鈕座に四葉座のものが現れ、最後に銘帯が消失し、斜角線紋帯にかわるという流れが 10 点ほどの遺物で示されていて、変化の過程が理解できとても面白かったです。また『居撰元年』銘のある連弧紋銘帯鏡が年代を指し示す重要な資料ということを知り、現代の人間と当時の人間が共通して使用している文字資料の重要性を感じました。

多数展示されていた方格規矩四神鏡は、紋様の配置などに規格性をもっている印象を受けました。アルファ

ベットに類似する紋様は、天と地を繋ぐ綱のような役割を表していると考えられるとのことでした。四神などに注目して観察していましたが、図形のような紋様も意味をもち、それらが配置されていることに興味がわきました。四神が東西南北を守護することで安泰を願う気持ちが表現されていると聞き、その時代の人々の理想の世界観が図化表現されているということに納得しました。

また、『建初八年』銘をもつ神人龍虎画像鏡の展示では、画像鏡の成立年代が、今まで推測されていたものより四半世紀さかのぼることが立証されたというお話を、発見の経緯もふまえて聞くことができました。画像鏡は東王父と西王母を中心とした様々なストーリーが表現されているようで、興味深いものでした。

漢の鏡は点数も種類も多く、圧巻の展示でした。神奈川県周辺の倭鏡を拝見したいなと思い見学したのですが、漢の鏡についての展示コーナーは、説明やキャプションも興味をひく内容で、漢代における鏡の様式の変化が理解でき、勉強になりました。

III 章では呉・魏の鏡、三角縁神獸鏡というテーマが設定されていて、呉の多様な鏡式の鏡が展示されていました。西晋によって滅ぼされる頃の鏡は、表現が簡素になるということが展示品の呉末期の鏡で示されており、その時代の情勢も反映されるものだと感じました。魏の鏡に関しては前漢と後漢を模倣したデザインを使用したこと、鈕孔に特徴があるとのことでした。三角縁神獸

鏡に関しては製作地について議論が続いている段階で、魏の鏡の中で捉えられるのか、別の可能性があるのかという問いに基づいて展示されていて興味深かったです。

Ⅳ・Ⅴ章では、倭人によって製作された倭鏡は、中国鏡を模倣しつつも紋様がアレンジされたり、直弧紋や家屋紋などオリジナルな紋様が誕生したり、鏡のサイズが多様に変化した様子を解説していただきました。展示されていた巨大な鏡は大変見応えがありました。神奈川県と東京都から出土した鏡を中心に展示されているコーナーでは、鏡一点一点デザインの異なりも感じられ、個性のあるものが多いと思いました。中

平成 27年度第 3 回見学会参加記
かながわの遺跡展
『縄文の海・縄文の森』見学記
桑原 安須美

毎年開催される神奈川県埋蔵文化財センター主催の「かながわの遺跡展」ですが、私はこれまで単独でしか訪れたことがなく、神奈川県考古学会の見学会に参加するという形で見学するのは今回が初めての体験でした。会場は神奈川県立歴史博物館、当日は 30 人近い参加者が地階にある講堂に集合し、まずは展示を担当された加藤勝仁氏から展示趣旨と構成とについて簡単な紹介がありました。その後、配布されたカラーの図録を手に展示室に移動し、約 1 時間にわたって、細部にわたる丁寧な解説をいただきながら展示資料を見学しました。随所で参加者からいくつもの質問が上がり、質問からさらに遺物や遺跡についての踏み込んだ説明へと話題が発展していき、非常に有意義な展示見学でした。

展示室の入口では貝層の剥ぎ取りが見学者を迎えます。導入として、廃棄とモノを送る場としての貝塚の説明があり、その貝塚から出土する遺物を軸に、大きく 2 室に分かれた展示スペースの前半で海と関わる資料が、後半ではこれに低湿地遺跡からの出土品を加えて森＝陸地での活動に関わる資料が展開します。特に今回は特殊な条件下で遺存した有機質資料が多数とりあげられており、近年の保存技術の飛躍的な向上と県内での低湿地調査件数の増加に伴う成果とを改めて実感しました。

「海の恵みと生業」と題した前半部では、東京湾岸から三浦半島にかけての貝塚遺跡出土のお馴染みの骨角器群に加え、相模湾沿岸の羽根尾貝塚や堤貝塚、西方貝塚等の出土遺物とが一堂に会し、外洋漁撈から沿

国と日本の思想や情勢の違いなど、鏡にも反映されているように感じました。

今回古鏡の展示を拝見して、中国で誕生した鏡がそれぞれの時代の思想を紋様として取り入れ、時代背景を反映しながら展開していった様子を知ることができました。説明を受けながら展示を見学することで、その流れをよりわかりやすく知ることができ、非常に勉強になりました。また倭人が中国鏡をアレンジし、彼らのニーズにあった紋様や形に変化させながら、社会に取り入れていった過程に興味関心がわきました。展示見学会に参加させていただき、どうもありがとうございました。

岸漁撈まで様々な海の生業にかかわる資料が並べられていました。多様な形態を有するヤスや釣針を一度に観察できる貴重な機会でもありました。また、展示説明では自然遺物と出土漁具とを具体的に結び付け、当時の自然環境から季節性、捕採対象の志向性にまで言及し、推察される漁場の違いや漁法の多様性についても指摘され、出土資料を複合的に捉える昨今の考古学研究の視点の広がりを感じます。

製塩土器と推定される土器片の展示も目を引きました。製塩も海とかわる生業のひとつです。縄文時代における塩の流通形態、流通網にも興味がわきます。

後半は遺跡から出土した陸上の動物骨の数々から視点が森へと移っていきます。伊勢原市の西富岡向畑遺跡や小田原市羽根尾貝塚で出土した編籠類を筆頭に網代や縄等、保存処理を施された有機質資料が多数展示室に置かれていたことに強いインパクトを受けました。木材に樺の樹皮や蕨の繊維を巻き付けた資料、芯材に撚縄を横巻した資料（セキヤムとして展示）は、土器や石器に観察されてきた繊維痕跡の具体的な形状を示唆する事例であり、複数素材を組み合わせた縄文時代の数々の道具が目につかぶようでした。低湿地遺跡からの出土遺物は、当時の生活の様子を雄弁に語るものであり、縄文人の生業が紛れもなく現在の私たちの生活に連なる営みであることを感じさせてくれるものでした。

最後のコーナーでは、装身具が集められていました。今年度の神奈川県考古学会の講座テーマはまさに縄文時代の装身具です。実際の遺物をじっくりと観察することができ、講座への関心も高まりました。

今回の展示では、めったにお目にかかれない遺物も数多く展示されていますので、県立歴史博物館での会期を逃した方も、海老名で開催される同展示の巡回展へ足を運んでみてはいかがでしょうか。

～個人寄稿文：資料紹介～

江ノ島に所在する中世石碑 ～その意味と重要性～

古田土 俊一

はじめに

神奈川県藤沢市の江ノ島は現在、観光名所として著名であり、古くから信仰を集めることでも知られる島である。江島神社の三宮や龍穴、鎌倉期作成の弁財天像など信仰を象徴する文物が衆目を集めるなかで、中世石碑の存在を知る者は少ない。

石碑は辺津宮の一角に覆屋（雨よけ）が掛けられた状態で立つ。高さ138.0cm、幅74.3cm、厚さ10.5cmの長方形の板のような形状をとり、ほぼ中央で二つに折れた痕跡があるものの、残りは良い。鎌倉時代に宋国から持ち帰ったとの伝承があるため、俗に「宋国伝来の碑」とも呼ばれるが、その詳しい来歴は江島神社の別当を務めた岩本坊に伝来する「江島神社縁起絵巻」に描かれている。第五巻第三段には、石碑を背に二人の僧侶が向かい合う場面、僧侶が碑を背負って海を渡る場面、そして下宮境内に石碑が立てられる場面が描かれ、詞書によると元久元年（1204）に慈悲上人良真が中国に渡り、慶仁禅師に参じて受法し、長さ五尺、幅三尺の「弘誓明石」を伝授され、帰国後、將軍に請い、「旧跡」に社壇を復興したことが記される。この史料の制作は室町時代とされるため、石碑は少なくとも室町時代には江ノ島に存在したことになる。

以前私は、仏教史の大塚紀弘氏とこの石碑を調査する機会を得た。肉眼では確認しづらかったが、拓本を採取すると「大日本国江島靈迹建寺之記」と記された中央の額と、額を挟んで向かい合う二匹の龍が浮かび上がった。残念ながら石碑の下半分は風化が激しく採拓できたのは数文字だけだったが、おそらくは碑文が記されていたのであろう。そこでまずは、この龍がどういった存在であるのか、また、この石碑がもつ意味を明らかにするべく検討した結果、その歴史的重要性を知ることとなった。周知の機会になれば幸いである。

石材の産地

調査ではまず石材の鑑定を行ったが、石碑に用いられた石材は県内の中世石造物に用いられるどの石材とも違っていった。紫色ともいえる赤味を帯びた凝灰岩は、県内では産地も類例も見あたらない。

この点はすでに江戸時代に指摘があり、随筆



「大日本国江島靈迹建寺之記」石碑上部拓本

『中陵漫録』（1826年）には、伯耆国米子の寺院に同種の岩石があり、長崎の近くが産地であると記される。また、筑前国の「阿弥陀経の石」も同種であるから、江ノ島の石碑も筑前国や薩摩国辺りの石材で作られたのではないかとある。この「阿弥陀経の石」は、福岡県宗像市の宗像大社に伝わる重要文化財「阿弥陀経石」のことで、使用された薄紫色の凝灰岩は、近年では長崎をはじめ九州一帯に分布する「薩摩塔」とともに寧波付近産出の中国石材であるとの指摘がある。日本国内でも同様の特徴をもつ石材は採れるようなので注意は必要だが、もしも江ノ島の石碑が中国産石材であるならば、伝承にある通りであり、これまでの研究で判明している中世の中国石材使用例で最も東に位置する例、関東では唯一の例となる。

文様の検討

次に石碑にある双龍の文様を追った。管見に入った類例は4件であったが中世は1件のみと少ない。その1件、東福寺の所蔵する重要文化財「孝宗御書太白名山四大字碑銘」は、中国寧波の天童寺にあった石碑の拓本で、東福寺開山の円爾が入宋時（1235～41年）に持ち帰ったものといわれ、よく似る。江ノ島の石碑より古い例となる。それ以外の類例はどれも江ノ島近郊にあり、制作年と文様構成から、江ノ島の石碑を参考にした可能性が高い。鎌倉市大倉の大江広元墓に立つ石碑「故正四位下陸奥守大江公碑」は、文政六年（1823）に長州藩第十一代藩主毛利齊熙が造立した大江広元墓前の顕彰碑であり、この石碑は「亀趺碑（きふひ）」の型式で表現されている。私は江ノ島の石碑がこの「亀趺碑」という種類の石碑なのではないかと考えた。

亀趺碑とは、亀の形をした趺石（台石）を有する碑をいう。台座の亀は「鬮履（ひいき）」という龍の一種であり、頂部には「螭龍（ちりゅう）」という別の龍を置く「螭首亀趺」の型式を基本としている。中国南北朝時代（439～589）ごろに定着した碑形で、平勢隆郎氏の研究によれば日本へ伝来したのは江戸期以降という。造立の目的は「顕彰碑」であり、身分の高い者のほか神格化された文人や偉人、土地などでないと建立できない厳しい制約がある。文様の検討を進めると、どうやらこの亀趺碑の「螭龍」こそが、江ノ島の石碑の龍である可能性は高いという結論に至った。仮にそうであれば江戸期以前にこの種の石碑が日本に伝来していたことを示す資料として重要な価値を持つ。

石碑の記す内容と原位置

ではこの石碑は何を記し、どこに立っていたのか。大塚紀弘氏の検証を参考にみると、手がかりは篆額の文字にある。篆刻された「大日本国」「江島靈迹」「建寺之記」三行の文字は、「江ノ島の奇跡が起きた場所に寺院を建立した経緯の記録」を意味する。「江島縁起絵巻」と、その基になった漢文の『江島縁起』（1323年奥書）をもとに奇跡の事例を探した結果、3つの記事が該当した。

①空海による金窟社壇の創建

弘仁五年（814）空海が金窟（龍穴）の中で天女よりお告げを得、弁才天像を金窟に安置し社壇を建立した。

②円仁による東山社壇の創建

江の島を訪れた円仁のもとに弁才天女が出現。弁才の五寸像を彫り、東山の頂上に社壇を開く。

③良真による東山社壇の再建

良真の前に聖天島に弁才天が現れ、円仁が開いた山頂の社壇の荒廃を嘆く。のちに良真が再建した。

大塚氏によれば、このいずれか、あるいは複数が石碑に記されていた可能性が高いという。なお、この石碑は顕彰する土地に立っていたはずであるから、大塚氏の論に則れば立地の候補が2ヶ所に絞られる。ひとつは円仁・良真ゆかりの旧跡である東山の頂上、もうひとつは空海ゆかりの金窟（龍穴）である。

東山の山頂は現在植物園や展望台が建つ場所であるが、中津宮付近も候補地となるだろう。実はこの場所は「亀の背」になる場所でもある。江ノ島が亀に例えられることは多くの地誌類が記しており、山二ツを境に標高の低い西山を頭、高い東山を甲羅と見立てたことによる。

甲羅の頂部となる東山山頂に石碑が立てば、構造的に亀趺碑に似た形態になるというのは考えすぎだろうか。

一方で、江ノ島には龍穴という神聖な空間が存在する。この洞窟が聖地江の島の信仰の中心として機能していたことは、『吾妻鏡』等の史料が証明するところであり、特に仏教や陰陽道の儀礼が行われた。現在もこの場所は、信仰対象であるが江の島第一・第二岩屋と呼ばれ、観光名所として著名である。実は、この岩屋の眼前の岩礁帯に「亀石」と呼ばれる石が存在する。

岩屋を背にし、海に頭を向けるこの石のことを記した史料は見当たらないが、伝承では片瀬の石屋、中村亀太郎氏が作成したものと言う。一度はこれを亀趺と考えたが、調査したところ前肢がヒレで表現されており、霊獣「鬮履」の獣足ではないことがわかった。近年、おそらくはこの付近が隆起した関東大震災以降に造られたのであろう。

しかし、貞応二年（1223）の紀行文『海道記』によれば、鎌倉時代の江ノ島は船の通過する海洋の方角が「御前」であった。もし龍穴に霊迹を顕彰する碑が建っていたのであれば、海の方角を向いていたであろうし、そのような場所に海を望む亀の石造物があるのは、どうしても無関係でないような気がしてならない。江の島に亀の伝承は多いが、その中でも特に龍穴の本社である奥津宮に文物が多く残ることも含め、ここには亀に関する何らかの伝承があったと見たい。

おわりに

以上、江ノ島の石碑の重要性を概観した。私は鎌倉周辺が目印になる山には、中世の大型石造物が立っていたと考えている。特に風光明媚な江ノ島に中世石造物が無いのを訝しく思っていたが、石碑の存在によってようやく得心することができた。詳しくは『鎌倉』第116号「江島の中世石碑」を御覧いただきたい。



亀趺碑の一例「大江広元墓」

講座案内
平成 27 年度神奈川県考古学会講座

『縄文時代の装い』

日時：平成 28 年 2 月 21 日（日）
午前 10 時から午後 5 時まで
場所：横浜市歴史博物館 講堂
（横浜市都筑区中川中央 1-18-1）

内 容

講演・講座

『縄文人の装い』

小林達雄氏（國學院大學名誉教授）

『骨角・貝製品からみた縄文人の装い』

金子浩昌氏（東京国立博物館客員研究員）

『死者の装い』

中村耕作氏（國學院大學栃木短期大学）

『石製品からみた縄文人の装い』五十嵐睦氏（平塚市教育委員会）

対談

小林達雄氏・金子浩昌氏『縄文人の装い』

事前申し込み不要。入場無料（ただし、資料代は有料）。

問い合わせ先：soumu@koukokanagawa.com

※ 詳しくは、Web 版「考古かながわ」をご覧ください。

～今年度の考古学講座では、神奈川県内における縄文遺跡の装身具のあり方をみることで、この地に暮らした縄文人の精神世界やものづくりの一端について考えてみたいと思います。ネックレスやイヤリングなどのアクセサリ（装身具）は縄文人にとってどのような意味をもっていたのか、その用途や使用方法などを探るなかで、縄文人の精神世界に迫ります。～

編集後記

連絡紙第 55 号をお届けします。村澤会員の巻頭言は、遺跡調査報告書のデジタル化プロジェクトについて。この画期的な取り組みに後れをとる神奈川…待たなしの状況です。

古田士会員による資料紹介は、中世の江ノ島について新たな視点を示す意欲作です。

なお、押木会員の見学会参加記は、早くに原稿をいただきながら、掲載が遅れました。関係者の皆様に深くお詫言いたします。

平成 27 年度考古学講座

縄文時代の装い

対談 小林達雄氏 × 金子浩昌氏

講演
(1) 『縄文人の装い』 小林達雄氏（國學院大學名誉教授）
講演
(2) 『骨角・貝製品からみた縄文人の装い』 金子浩昌氏（東京国立博物館客員研究員）
(3) 『死者の装い』 中村耕作氏（國學院大學栃木短期大学）
(4) 『石製品からみた縄文人の装い』 五十嵐睦氏（平塚市教育委員会）

※ 講演の順番は(3)、(4)、(2)、(1)、対談となります。

日時：平成 28 年 2 月 21 日（日）10 時～17 時（予定）
場所：横浜市歴史博物館（横浜市都筑区中川中央 1-18-1 横浜市営地下鉄「センター北」駅より徒歩 5 分）
事前申し込み不要。入場無料（ただし、資料は有料）。
お問い合わせ先：soumu@koukokanagawa.com
主催 神奈川県考古学会 共催 横浜市歴史博物館

考古かながわ 第 55 号

発行 神奈川県考古学会
発行日 2016 年 2 月 1 日
編集 連絡誌部会：桑原・高橋・古田士
印刷（有）湘南グッド
発行者 神奈川県考古学会 会長 岡本孝之
郵便振替 00240-9-71208
E-mail soumu@koukokanagawa.com
U R L http://www.koukokanagawa.com